【緑地を楽しむ本】

『ちきゅうがウンチだらけにならないわけ』

松岡たつひで／著　　福音館書店（2013年6月）

犬の散歩にはビニール袋を持っていく、これは散歩のマナーですね。 この本は、ウンチを始末してもらった犬が、「でも、僕以外の生きものはだれもウンチを拾ってもらわないぞ？」という疑問を持ったところから始まります。 勉強家のこのワンちゃんはイヌ図書館に行って世界中の生きもののウンチを調べ始めます。

イヌの顔くらいもある大きなゾウのウンチや、とっても小さいミミズなどのウンチもあります。 たいていは地上でウンチをするけれど、木の上で生活する生きものは木の上でします。 空からウンチをしたり水の中にウンチをしたりする生きものもいます。 こんなにみんながウンチをしたら、地球はウンチだらけにならないのでしょうか？

いえいえ大丈夫、ウンチは大いに役立っているのです。 地上のウンチは雨に溶けて土にしみこみ、やがて植物の栄養になります。 川や海に流れ込んだウンチは海藻の栄養になったり小さな生きものの餌になったりします。

でも、中にはおもしろい使われ方も。 ウンチはスカラベという甲虫の幼虫の食べ物だったり、鳥や動物が食べた植物の種を遠くにばらまく運び屋だったり。 小さな虫たちの中には、鳥に襲われないようにウンチを隠れ蓑にしているものもいます。 自分のウンチをどんどん背中に乗せていって、僕、虫じゃないよ～ウンチだよ～と、鳥の目をだましているらしい。
ふーん、ウンチって地球の自然の中で、役に立っているんだなあ、とワンちゃんは（読んでいる私も）感心します。 でも、振り返って、ワンちゃんのウンチはごみ箱に捨てられます、人間のウンチはトイレで流されます。 何かの役に立っているのかなあ？？ 昔のボットン便所やバキュームカーを知っている世代は少なくなってきました。 トイレだけは本当に快適になってきたと思います。 でも・・・ ワンちゃんと同じ疑問を、私もいつも感じて、考え込んでしまいました。

それにしても、熱帯ジャングルの生きものから北極の生きものまで、なんと多くの生きものたちがこの1冊の本に描きこまれていることでしょう！ 100、150・・・ 数え切れません。 よく知っているもの、名前だけ知っているもの、全然知らない生きものまで、みんな元気にウンチをしています。　　（小川）